

## 中東フリーランサー報告

(第33回)

中東フリーランサー

### <目次>

1. ダマスカス陥落とバグダッド陥落を比較する
2. イラン政権軟化の兆し?
3. 困った時のゴーン頼み?
4. 沈黙のガイドが語る「包括性」とは?

—————\*—————\*—————\*—————\*—————

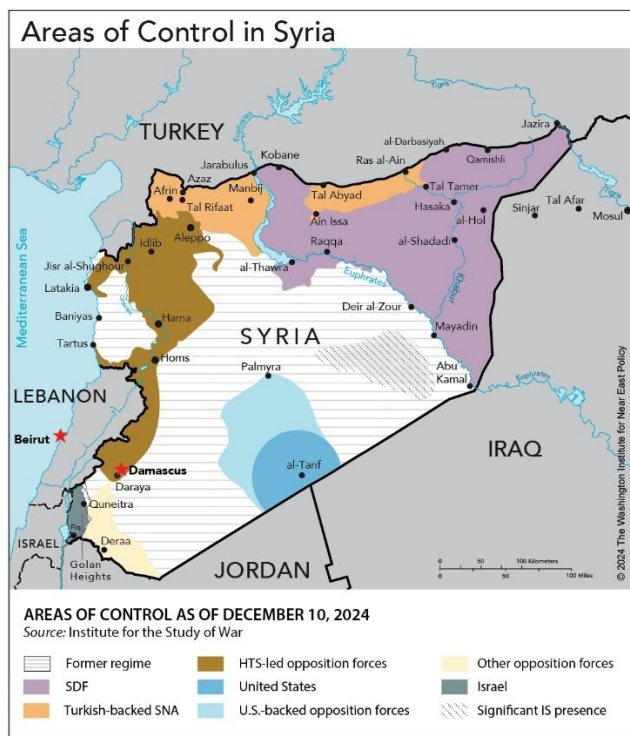
最近では中東フリーランサー報告を発売した直後に必ず何かが起こります。前回の発信時は、レバノンとイスラエルの停戦合意の発効日で、危うい停戦合意がどこまで守られるかに固唾を呑んでいたところでした。まさかそれが、2018年以來シリア北西部のイドリブ地区に蟄居して来た(はずの)反政府派の「トラトラ」の日になるとは思いもよりませんでした。そしてわずか3日後に、あの激戦地のアレッポが陥落したのには愕然としましたが、それからはあれよあれよと言う間に、ハマ、ホムスと陥落し、進撃開始11日目の12月8日(本当の「トラトラ」の日)には、ダマスカスが呆気なく陥落しました。(アレッポからダマスカスまでは、自動車ですら1日ですが、それにしても反政府派の進撃の速さには、彼らですらガス欠を心配したほどではないでしょうか。)

NYT紙(12月21日付)によると、政権崩壊を迎えた「シリアの一番長い日」、迫りくる反政府軍に向けて、バシヤール・アサドは反政府派と権力を共有する意向を宣言する「玉音放送」の準備を命じ、大統領宮殿には側近と放送関係者が集結させられていたとの事。しかし肝心の大統領は待てど暮らせど現れず。そして待ち続けること数時間、深夜に至り、大統領が消えたの報せが届き、一同パニックに陥ったとのことですが、なんだか映画「サウンドオブミュージック」のラストシーンを思い出させる内容です。

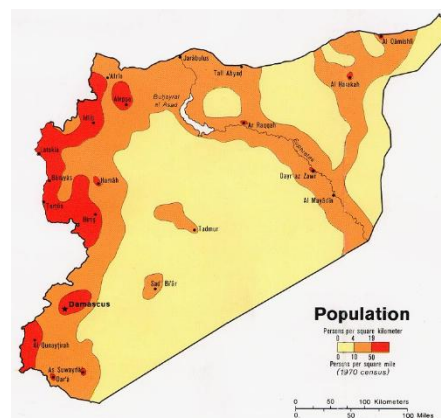
アサドが消えたダマスカス市内には反政府軍と群衆が溢れ、アサド一族はモスクワに逃亡し、プーチンから「人道上の理由」で亡命を認められたバシヤールですが、2000年に父ハーフェズから政権を引き継いでから24年間にわたる治世の内、半分以上が内戦だったことを考えると、今や流浪の身に落ちぶれ、「こんなことならロンドンで眼医者を続けていれば良かった」とボヤいているのかも知れません。長兄のバースィルが交通事故死さえしなければ、今頃ここにいなかったはずなのですから…。それでも今のところは、カダフィの末路にはなっていないだけ、感謝すべきなのかも知れません(内戦の犠牲者のことなど、もう頭には無いでしょう。)

2011年に始まったシリア内戦は、南部国境の街ダラアでの反政府市民デモがことの発端です。チュニジアのジャスミン革命に端を発し、エジプトの政変に繋がった「アラブの春」が、いかにも世

の正義かのようにムード化し、浮かれた市民の一部が蹶起したのに対し、これを「いつもの調子で」武力弾圧したアサド政権は、エジプトの教訓を全く学んでいなかったと言うべきか、デモ隊鎮圧を現場に任せた結果、消火どころか大火事に発展してしまい、以後 13 年にわたる血みどろの内戦に陥ったのは、ひとえにバシヤール・アサドのガバナンス能力の欠如の報いと言うべきでしょう。



注：左図はダマスカス陥落後の勢力分布図。こげ茶色が HTS 勢力、青紫色が SDF(クルド) 勢力、オレンジ色が SNA(トルコ支援) 勢力。青色が米駐留軍勢力範囲、空色が IS 盤踞地域。



右図はシリアの人口分布図。黄色部分は沙漠地帯で、IS の遊牧民的な盤踞以外の戦略的価値はユーフラテス河東岸の油田地帯のみ(その油田保護が米軍駐留の大義名分)。

アサド政権崩壊を受け、久しぶりに中東フリーランサー報告シリーズのバックナンバーを読み返してみました。「アサド独裁政権の圧政と弾圧、民衆の解放」云々のステレオタイプの解説が横行する今、内戦が進行形であった当時の観測と分析を検証してみたかったです。本報告は度々シリーズ名をリニューアルして来ましたが、2011 年にシリア内戦が始まって以来、以下のシリーズの各号でシリア内戦に触れました。この内太字下線の号が、特に詳述していますので、ご興味がある方には再送致しますのでお申し付けください。

- ① 湾岸と北アラブの経済情勢概観シリーズ： 5、10、11、13、**14**、
- ② 中東フリーランサー現地報告シリーズ： **1**、**3**、6、7、10、14、**16**、**18**、19、**20**、**24**、**最終回**
- ③ 中東フリーランサー東京報告： **1**、2、3、6、7、10、**18**、**30**、**33**、34、36、43、

今から読み返すと、平和的な市民デモへの過剰弾圧に対し、「プロの武装組織」による武力反攻本格化まで半年もかかっていません。そして一旦武力闘争になると列強の介入が始まり、一気に泥沼化しました。騒乱対策は、半年以内に安定化すべきと言う教訓です。中東フリーランサー東京報告の 18 号(2016 年 8 月)は内戦のクライマックスのアレppo攻防戦で、政府側が勝利し、反政府派はイドリブ県に封じ込められるのですが、ここまでにロシア、イラン、ヒズボラの助けを借

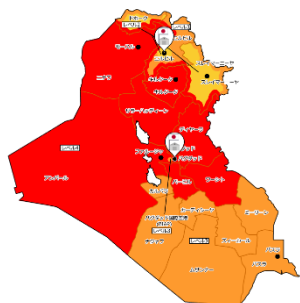
りても 5 年を要しました。しかし政府軍がそれ以上に反政府派を誅滅出来なかった理由は、背後のトルコの存在でした。それから 30 号(2018 年 7 月)まではさしたる報告も無いのですが、この期間はトランプ政権前期と重なります。30 号では、トランプがシリアからの撤兵を仄めかし、勢いづいたシリア・ロシア軍がダマスカス郊外と南部国境の反政府派を掃討し、イドリブに放擲した一方、北部国境では、米国のクルド支援縮小を好機と見たトルコがクルド支配地に襲い掛かったことを報告しています。

結局イドリブの反政府派自治区を巡っては、ロシアとトルコが手打ちをして、両軍の共同監視によるゲットー化の一方、シリア政府はユーフラテス河以東のクルド勢力圏を黙認し、以後膠着状態が 6 年間も続くことになりました。この間、イドリブの反政府派自治区ではヌスラ戦線のジャウラニが頭角を現す一方、南部国境地帯ではイスラエルがイラン革命防衛隊拠点を次々と爆撃したのですが、イランもロシアも反応せず、シリアも静観するばかりと言う「不機嫌な膠着と停滞」が始まる様子を 30 号で描写しています。

### 1. ダマスカス陥落とバグダッド陥落を比較する

TV ニュース映像では、群衆監視の中で父ハーフェズ・アサドの銅像が引き倒されるシーンが繰り返し放映されましたが、私には 2003 年のバグダッド陥落時にサダム・フセインの銅像が引き倒されたシーンが重なりました。同じバアス党政権の隣国同士でありながら、愛憎半ばの関係が続き、1990 年の湾岸戦争では敵同士にすらなったイラクとシリアですが、どちらも偶像が倒壊する姿は、いずれも独裁者たちの、いつか来た道です。(父アサドの首が軽々と手渡しされていたのには驚きましたが、そんなに軽いのでしょうか？実はブロンズをケチっていたとか・・・)

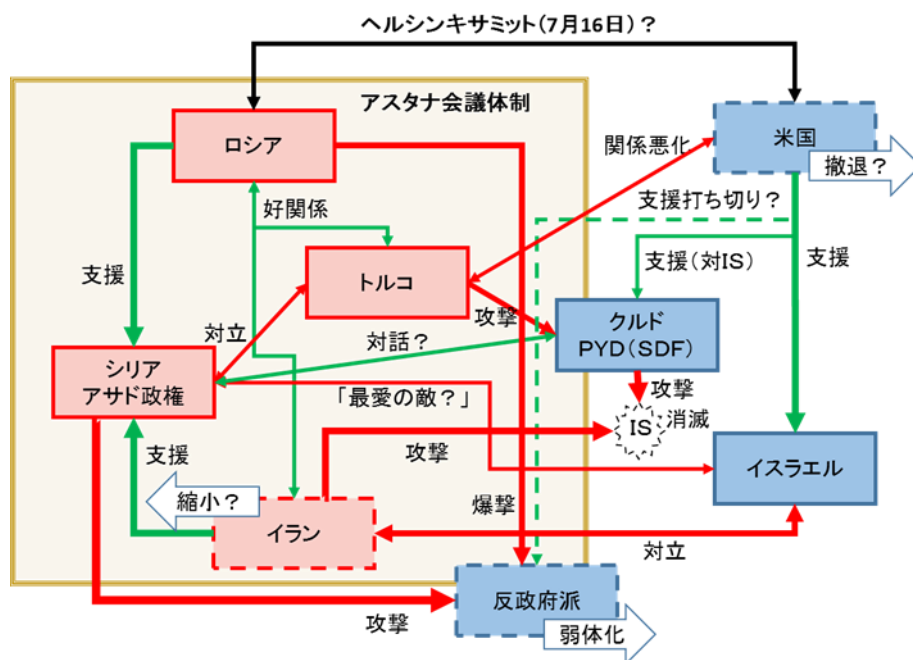
しかしバグダッド陥落と、ダマスカス陥落は質的に異なります。2003 年のバグダッド陥落は、米英軍と言う「十字軍」による征服でした。イラクの大量破壊兵器撤去の大義名分は、まったくの空手形に終わった上に、右も左も十把一絡げの無分別な社会制度の破壊は、際限のない混乱と殺戮を呼び、治安の真空にテロリスト集団が流入し、挙句の果てはイスラム国(IS)の出現と言う想像を絶する事態に至りました。IS を弁護する気はさらさら無いものの、100 年にわたり西欧に押し



付けられて来たサイクスピコ体制(イラク・シリア・ヨルダン国境の策定)への潜在的怨念が、あのように歪んだ形で噴出したのかと、当時は暗い衝撃を受けたものです。イラク戦争から早 20 年と言うのに、イラクは未だに日本政府の危険情報では真っ赤っかです(左図)。小泉首相が我が国史上最大の復興資金援助をしたものの、未だに日本人にとって足が遠くの国に留まっているのはまことに残念の極みです。元イラクの人質としては、サダム政権崩壊には喝采を叫びまし

た。しかし米国がアフマド・チャラビのような在外イラク人の利権屋に、(日本を真似た)戦後の国づくりを託そうとしたところに根本的な理解不足があり、結果としてイラクの民衆に気の遠くなるような安定への回り道をさせたしまったのは、なんとも浅はかなことだったと思います。

これに比べて、ダマスカス落城はちょっと違います。アサド政権は外国勢力に粉碎されたのではなく、国内反政府勢力(HTS)に打倒されました。言わば明治維新のようなもの(幕府から見れば薩長はテロリスト集団)。もちろん列強の政治的利害が背景にあり、それも英仏が利害を競った明治維新と似ています。シリアの場合、国連が内戦收拾の努力に奔走したものの効果なく、実際の仕切りは、内戦に深く関与したロシア、イラン、トルコの「アスタナ会議体制」(第一回会合がロシア主導でアスタナで開催)が行いました。以下は中東フリーランサー東京報告 30号で当時の勢力関係を描いた図ですが、これを見れば、ロシア、イランの弱体化が忽ちにしてアサド政権の危機に直結することが、感覚的に分かり頂けると思います(が、当時はそうなるとは思っていませんでした)。



ダマスカス入城を果たした HTS(シャーム解放委員会)の指導者アブ・モハメド・アル・ジャウラニ(「ゴラン高原出身」の意、アブは子供の父親の意。本名はアフマド・アル・シャアラらしいが)は米政府指名の 1000 万ドルの賞金首です。ご本人はイドリブ自治区に蟄居していた 2016 年にヌスラ戦線の卒業を宣言しており、ダマスカス入城後は西側好みの耳障りの良い声明を連発し、アサド政権崩壊直後 400 回以上もシリア軍施設を爆撃したイスラエルに対しても抵抗姿勢を見せず、シリア再建を最優先と断じ、インタビューにも愛想よく応えてメディア主導権を握った感じが奏功したか、米政府高官(リーフ次官補、ルベンスタイン中東局上級顧問、カーstens 大統領特使等)が接触した上で、彼の賞金首を取り下げました。明らかにアル・ジャウラニを勝ち馬と見て、いち早く米国が対シリア外交主導権を握ろうとの魂胆です。この変わり身の早さには、今まで米国の顔色を窺っていた国々はたまったものではありませんが、ロシアが地中海沿岸で唯一のラタキアの実験基地と空軍基地を保持する動きにくさびを打ち込む狙いがあったでしょうし、またトランプに手柄を立てさせたくないバイデン政権の残り時間が 1 カ月と言う切迫感もあってのことなのでしょう。

実は私は当初別の予想をしておりました。HTS 主導のシリア新政府を、むしろイスラエルが電

撃承認し、ゴラン高原領有(アル・ジャウラニの故郷)と引き換えに平和条約を締結したら、米国は HTS のテロリスト指名を取り下げざるを得ないのではないか。既にエジプト、ヨルダンと平和条約を結んでいるイスラエルは、これにシリアが加われば、国境の安全確保を達成し、ガザ・西岸からのパレスチナ人追放(民族浄化)に本腰を入れるのではないか。それを米国は黙認し、米国の安全保障が欲しい GCC 諸国も沈黙せざるを得ないのではないか。これが達成できればネタニヤフはイスラエルの守護神と讃えられ、裁判沙汰など吹き飛ばし、エルサレムに銅像が建ち、トランプと共にノーベル平和賞を狙うのではないかと妄想していたのですが、バイデン政権の動きの方が遥かに早く、私の「大胆予想」は吹き飛びました。



報道によりますと、アル・ジャウラニが反攻計画を口にし出したのは今年の 4 月頃だったが、トルコがブレーキを踏んでいたとのこと。エルドアンとしては 11 月の米大統領選挙の結果を見極める必要もあったのかもしれませんが、その間にイスラエルのポケベルテロが大成功し、ヒズボラもイランも身動きが取れなくなったことで、一気にゴーサインに繋がった模様です。レバノン停戦発効の 11 月 27 日が、HTS の「トラトラトラ」になったと冒頭で例えたのはそういう意味です。

12 月 21 日にはシリア暫定政府案が発表されましたが、首相に続き、国防相、外相の要職はすべて HTS 幹部が占め、アル・ジャウラニが国軍以外の武装解除を主張するなど、あたかも米国の裏書もらった形で権力集中化が始まろうとしているようです。米国を後ろ盾としてきたクルド系のシリア民主軍(SDF)は黙らざるを得ず、それよりもトルコを後ろ盾とするシリア国民軍(SNA)の火事場泥棒的侵攻への対処に忙殺される始末で、その間に HTS は着々と足場固めの環境づくりを進めつつありますが、果たしてこれがいつまで続くかどうかはまだ予断を許されません。

こうした劇的な外部環境変化に臨んで、どのような判断をすれば良いかですが、これに関して、かのドバイショック(2009 年)時のアブダビ商工会議所のシャムシ会頭の言葉「ラクダの群れが通り過ぎた後は、砂塵が収まるまで待つべきだ。」が思い出されます。これは単にじっとしてると言うことではありません。砂塵が収まるまでは一定の時間がかかりますが、一気に晴れる訳ではなく、徐々に視界が拓けます。そうした時に、砂塵の向こうの風景に勘のある者は、いち早く行動に移すことができると言う意味です。シリアの今後を見るに、目前の事象に右往左往するのではなく、本質を見極めて対処すべし、ということなのでしょう。砂漠の民の慎重さと機敏さを示す言葉です。

シリア内戦におけるテロ組織消長の経緯は公安調査庁のサイトがわかりやすく纏めてくれますが(下記)、アル・ジョラニは生き残りのために離合集散を都合良く繰り返してきた感じで、かつての過激派が、IS と手を切り、アルカイダから離れ、ヌスラ戦線から卒業したと言いつつ、本人の信条の変化ではなく、状況に応じた政治的判断なのでしょう。まあよく言えば柔軟でしたた



か。日本人が散々罵られたレバシリ商人の DNA をしっかり受け継いでいる人ではないかと思えます。ですから、成り行き次第で、一日で豹変する可能性はあります。まあ、ユダヤ人もそうですが、それこそ真の調和などあり得ない、「戦争と講和」の緊張関係を繰り返して来た中東世界の体現そのものだと思います。

[https://www.moj.go.jp/psia/ITH/situation/ME\\_N-africa/Syria.html](https://www.moj.go.jp/psia/ITH/situation/ME_N-africa/Syria.html)

実際アル・ジャウラニがダマスカス入城後のモスクでの第一声は「これはイスラムの勝利だ！」でした。今は洋服に着替えて穏健派をアピールしていますが、相変わらず髭はそのままです。そして群衆の中の女性の求めに応じてツーショット写真を撮ったりしたのですが、その際に女性に髪を隠すように求めました(優しくだったようですが)。これが BBC で報道されると、リベラル派(イスラム大嫌い派)は、彼のイスラム至上主義の本性が現れたと批判する一方、保守派(イスラム大好き派)からは、女性とカメラにおさまるとは何事だ、との非難が渦巻き、「虚栄心から世間の注目を集めたいだけの愚か者」との SNS 批判も出回っている由。これが直ちに「暗殺」に行き着くかどうかはわかりませんが、とにかくいきなり世界のメディアにデビューしたこの男の神経はただものではないと思う一方、こう言う「騒ぎ」を通じて、世間の反応を見定めている冷静さも感じる次第です。



## 2. イラン政権軟化の兆し？

さて、アスタナトリオも崩壊し、レバントでのシーア派の弧が薄くなる中、イラン国内での反体制のうねりを象徴するような事件が起きました。またも女性のヘジャブがらみの話です。12月11日、女性シンガーのパラストゥー・アフマディが、YouTube で 27 分間の「キャラバンサイコンサート」を公開したのですが、彼女はヘジャブを被らないどころか、肩と腕を露出した衣服(普通のステージドレスですが)で、男性伴奏者の前で歌を披露した(右写真)、と言うことで 14 日に逮捕されました。



しかし罪状は公表されないまま、彼女はお灸を据えられただけで釈放された由ですが、ヘジャブだけでも問題なのに、この服装は、イラン社会としてはかなり大胆でした(ただイランの場合、プライベートでは当たり前の服装。オンラインコンサートの HP は以下の通り。よろしければどうぞ)。

<https://www.youtube.com/watch?v=oYcaDHEnhbU>

ヘジャブ着用を巡っては、着用を強制する警察に抵抗した女性の死亡が全国的な反政府抗議運動となるなど、常に市民の不満の爆発の火種でしたが、本来こうした宗教的道德観に基づく強

制はイランだけではなく、対岸のサウジアラビアも同じでした。しかし、サウジアラビアは MbS 皇太子の開放化政策で有名無実化してきたのに対し、イランではヘジャブ着用義務の強化を求め、故ライシ前大統領の時代に上程された法案が、穏健派ペゼシュキアン大統領の今になって漸く可決され、俄かに逆行ムードが漂っていました。

ところが 12 月 13 日、イランの最高国家安全保障会議(SNSC)は、この法案の施行を保留にするとの決定を下しました。SNSC は最高指導者を頂点に、政軍幹部が参集し、国家安全保障問題に関する決定を行う機関で、いわばイランの枢密院。大統領が議長をつとめますが、最終意思決定には最高指導者の「あ、そう」の一言が必要です。議事の内容は公開されませんので、最高指導者が積極的に支持したかどうかは不明ですが、少なくとも拒否権を発動しなかったことだけは確かです。最高指導者は沈黙を保つことで、ペゼシュキアン政権に対する強硬派の批判をかわしつつ、本人の面子も守る形となりました。上記のアフマディ嬢が一時的な逮捕だけですぐに釈放された背景には、このような動きがあったようです。

イランは冬を前にして暖房用の天然ガスが不足気味で、国民の不満が溜まりつつある中、先日のイスラエルとの空襲の応酬ではイラン国内の防空体制が丸裸にされ(イスラエル側発表)、一方ではアサド政権が蒸発し、来月にはトランプ 2.0 が発足すると言う、正に内憂外患の環境下、これ以上敵につけ入らせる隙を作らないことが、国家安全保障上の最重要事項であると判断したのでしょう。国会は立法権の侵害だと怒っているようですが、イランの制度上仕方ありません。穏健派大統領の面目を保った感じですが、これも外部環境の変化あってこそと言えるでしょう。

いずれにしても、イランにとってはなんとも情けない年の瀬となりましたが、それもこれもウクライナ戦争悪化でロシアが手を取られている真っ最中の昨年 10 月 7 日、ハマスが頼みもしない越境攻撃を仕掛けた結果、イスラエルに無差別攻撃の白地小切手を与えてしまい、予想外の大規模幹部暗殺はヒズボラにまで及び、ヒズボラは対外遠征能力を喪失しました。イランにとっても想定外の対イスラエル戦を強いられることとなり、結果として防空機能は壊滅し、核開発施設も石油産業も今のところは無事ですが、いつ爆撃を受けてもおかしくない丸裸状態となってしまったようです(それにしてもロシアの S300 対空ミサイルが働いたと言う話を全く聞かないのは、いったいどう言うことなのでしょうか?)ハマスの電撃作戦はイランにとっても寝耳に水だったようですが、当初の戦果にイラン政府が悪い顔をしなかったことが今に響きました。その影響が巡り巡ってヘジャブ強制法の運用停止です。正に春秋の筆法をもってすれば、ハマスがイラン女性をヘジャブから解放したと言うことかも知れません。



メルシー、ハマス！？(テヘランで)

### 3. 困った時のゴーン頼み？

以上年末に向けてなんと厳しい「抵抗の枢軸」ですが、一連の騒動に特にとぼつちり感が強いのがレバノンです。いまだに暫定政権のままでイスラエルの猛爆になす術もないレバノンですが、この事態を挽回できる人間はいないのか、と言うことで、名前が挙がったのがあのカルロス・ゴーン氏です(アラビア語ではゴスンと発音します)。

アラビアンビジネス誌がインタビューをし、19世紀半ば以来の経済苦境に直面するレバノンの経済立て直しに向け、現状のレバノン政治の停滞を打開する為に一肌脱ぐ気は無いのかとの問いかけに対し、ゴーン氏は政界入りの可能性を即座に否定しました。ちなみに、19世紀半ばの不況と言うのは、レバノン地域のアラブ人(シリア人と分類された)が、食うに困って大量に大西洋を渡った発端です。実際ゴーン氏には、2年間空席の次期大統領候補として推す声が各所から挙がっている由。彼はブラジル生まれのレバノン系3世ですが、レバノンの大統領はキリスト教マロン派しかなく、彼もマロン派なのかどうか、私は知りません。彼の母親がナイジェリア育ちのレバノン人と言う点も興味を惹くところで、実際ナイジェリアには相当数のレバノン人が現地で生まれ、国籍も取得しています。ラゴスの造船大手ナイジャードック(NigerDock)の経営陣も、ナイジェリア国籍のレバノン人でした。そんな血筋のゴーン氏は、まさに生まれながらの国際人と言う訳です。

政界入りを即座に否定したゴーン氏ですが、レバノン再建には強い意欲があり、自らは政界には打って出ないものの、現状の経済的苦境を克服する為に、新政権をビジネス面で支援する気持ちは強いと述べ、相変わらずの越後屋ぶりを感ぜさせました。そして経済復興には、世界に散らばるレバノン人(国内のレバノン人より多い)の助けを借りる必要があります、その為の人脈には自信がある模様です。稀代のコストカッターらしく、レバノンは小さな政府(外交、軍事、治安、法治のみ)で十分とした上で、レバノンはレバノン人の力だけで復活できると強調しています。

今回の日産・ホンダ経営統合にも辛口発言のゴーン氏ですが、やはり国際ビジネスマンとしての知名度は抜群で、このまますっこんでいる人ではないのでしょうか。それは、レバノンと言う国自体の持つ歴史的強靱さに通じます。ペイルートの市内を歩いていると、突然瓦礫の山が現れたりするのですが、聞くと「これはローマの遺跡、あれは内戦の廃墟」と言った具合です。3千年の建設と破壊の歴史を平然と呑み込むレバノンは、イスラエルが叩いても叩いてもと言う感じで、今後もしたたかな存在であり続けるのでしょうか。それは本来、震災や戦災から復興を遂げた日本人も同じはずなのですが、ゴーン氏のお馴染みの弁舌を聞いていて、ちょっと複雑な気持ちになりました。

### 4. 沈黙のガイドが語る「包括性」とは？

さて、今年も愈々押し詰まって来ましたが、最後にクリスマスの贈り物として、UAEの聴覚障害者ツアーガイドを紹介したいと思います。

アルアイン生まれのマジッド・ムラド・マゼール・アルブロウシ君(次頁写真)は、生まれつき耳が



聞こえない 30 歳の若者ですが、聴覚障害者コミュニティのための旅行体験創出を目的とする「アムサーン・アクセシブル・ツアーズ」のブランドアンバサダー兼リレーションシップマネージャーとして活躍しています。彼と同じく聴覚障害者のツアー客のツアーガイドとして、アブダビの多くのアトラクションを、見るだけでなく、意義と重要性を深く理解して貰うガイドをしています。

今般ドバイでは初の聴覚障害者向けイベント「ドバイ・デフ・フェスト」が開催され、その参加者たちのガイドもしたアルブロウシ君ですが、「私の役割は、アクセシビリティを促進するためのコンテンツを作成し、聴覚障害の旅行者がつながりを感じ、自ら参加していると感じられるようにツアーをガイドすること、そして聴覚障害者コミュニティに情報を提供するための手話で、アクセシブルなニュースを発信することです」とガルフニュースのインタビューに手話で語っています。実は彼の二人の兄も視覚障害者なので、家庭内では三番目のろうあ者である彼に対する予めのサポート体制はあったのですが、それだけにそうしたサポートの有難さと同時に、一歩外に出た時のハードルにも直面しながら成長したと言います。



しかし、これらの体験が彼の視点と使命を形成し、こうした社会的ハードルが「聴覚障害者への包括性を育むために、手話の認識を促進することの重要性を教えてくれた。」として、医療などの重要分野や、警察を含む政府機関で、訓練を受けた通訳者の必要性を主張しています。「コミュニケーションの障壁は、特に公共サービスを利用したり旅行したりする際に、フラストレーションや排除につながるがよくあります。多くの聴覚障害者は、誤解を恐れたり、不慣れた環境でサポートを受けられないと感じたりして、一人で旅行することをためらいがちです。」「私は、交流しようとする人々に強固で有意義な関係を築き、それが幸せをもたらすことに大きな喜びを感じます。アムサーンとしての役割を通じて、聴覚障害者やそれ以外の人々とつながり、包括性を促進し、旅行の障壁を打ち破ることが、さらなる相互理解に繋がるのです。」と語っていました(手話で)。

なんと立派な若者だ、と称賛する前に、彼はアラブ人として本能的に包括性の意味するところを体感しているのではないかと感じました。中東の国々は、民族、宗教、言語が入り乱れた文明の坩堝です。それだけに一歩間違えれば孤立し、他者との衝突に繋がりがちですが、それを乗り越えれば、極めて多様性に富んだ社会を創り上げます。しかしその内容は西欧の近代的な社会規範とは異なるものかも知れませんが、それはそれで理解する器を持つことが必要なのでしょう。

今から 45 年前、バーミンガム大学に留学時、英国人の学生ボランティアに連れられてドイツの精神病院を訪れたことがあります。ドイツ語がわからない私に、にこやかに近づいて来た老人が笑顔でなにやら語りかけてきたので、握手をしながら英語で応えたのですが、その内英国人学生が駆け付けて来て「彼は正常ではないんだ、話していることに意味は無い。」と私を引き離したの

ですが、その時に感じました。言葉が通じなければ耳が聞こえないのと同じ。しかし、心が通じれば、言葉が聞こえなくても良いかも知れない。共通言語は笑顔なのか。アルブロウシ君の言う「包括性(inclusivity)」はどうあるべきか。商社にいた人間として、国際ビジネスの進め方についても、課題を投げかけられたような気がしました。日本・中東間の会合となると、つい日本が中東に何を貢献できるかの話題に固着しがちですが、むしろ中東から学ぶべきものがある。それを探求するための対話こそ、中東の人々との理解を深めるために必要と痛感する次第です。

以 上